

【書評】

**Kenneth J. Arrow, Kristen Renwick Monroe, and Nicholas Monroe Lampros, eds.,
with a foreword by Amartya Sen,**

On Ethics and Economics: Conversations with Kenneth J. Arrow

London, New York: Routledge, 2016, ix + 239 pp.

奇しくも 2017 年 2 月に 95 歳でこの世を去ったケネス・J・アローの生前最後のまとまった出版物となった本書は、アローへのインタビューの形式で収録された 4 つの章とアマルティア・センの序文、編者による本編後の更なるインタビューから構成されている。アローが、20 世紀アメリカ経済学の巨人と呼ばれるにふさわしい、経済学に残した数理を駆使した業績の偉大さ全体から見れば、この著作のタイトルがいささか風変りに見えたとしても無理からぬことだろう。しかし、この本の関心はアローの長年の研究領域である経済学それにはない。この本は、数理化されたカギ括弧付きの「経済学」の枠組みからアローの言葉を引き出すのではなく、より広いところから、アローという一人の人間の晩年の思考を引き出すことに問題関心を置いている。それもそのはず、本著作の主要編者であるクリスティン・レンウィック・モンローはカルフォルニア大学の政治学部教授で、経済と政治の中間領域と倫理学に関心を持ってきた。したがって、インタビューの内容には編者の問題関心から近年のアメリカ政治の動向に関わるが含まれていて興味深い。そのインタビュー自体は、2008 年夏から 2013 年にかけて断続的に行った聞き取りを加えて構成されている。実はアローへのインタビューは過去にも G. R. フェイウェルや J. S. ケリーといった幾人かの研究者がすでに行っており、本著作と重複する部分があるのだが、編者がアローの足場である「経済学」ではなく、

その周縁部分、アローの研究活動の外側にあるものに目を向けていることで、本著作はこれまでのインタビューと異なる部分を有しており、我々は本書からアローの新たな一面を知ることができる。

本書の第 1 章 (A Life in Economics) は、ニューヨーク市立大学からコロンビア大学、コウルズ委員会、そして RAND 研究所を経てスタンフォード大学、さらにはハーヴァード大学と研究の場を変えながら経済研究を行ったアローの半生、人々との交流や教育、家族等について、彼の口から語られたものがまとめられている。すでに述べたがこれらの事実は過去のインタビューと重複する点が多い (ちなみにこの章はアローが在籍したスタンフォード大学のオーラル・ヒストリー・プロジェクトによって 2011 年秋にアローにインタビューしたものである)。それにしても、何度読んでも驚かされるのは、アローという経済学に多くの足跡を残した人物の経済学との出会いが経済的理由から自宅に近いコロンビア大学へ進学したこと、そこで出会ったハロルド・ホテリングからの導きであったということだ。この彼自身の個人的事情がなければ、アメリカにおける数理経済学の発展過渡期にアローが参加することがなかったかもしれないというのは、歴史に仮定を入れるのが無意味と知りつつも、思いを馳せずにはおれないことだ。

続く第 2 章 (On Ethics and Economics) は、著作のタイトルにもなっている、倫理と経済

学のアローの思索の断片がまとめられている。第1章にある彼の来歴とも関係があるが、ここで彼によって語られるのは、アローが自らのキャリアの初期のころから倫理的問題に関心を持っていたということだ。RAND 研究所でのオアフ・ヘルマーとの邂逅と不可能性定理の着想、投票行動の持つ倫理的側面への関心、心理学、行動経済学、ミルトン・フリードマンに対するコメントなどが語られている。とりわけ、アローの経済学という学問領域に対する認識は、関心を引く。アローは経済学が単に経験的で価値自由な研究領域としてあるのではなく（とはいえアロー自身もこのアプローチで幾つもの研究を行ったわけであるが）、経済学が人間の学問である限り、根本的に経済学は倫理学と関係があるのだという。アローの経済学に対する広い展望を裏付ける内容となっている。

第3章（The Global Economic Meltdown of 2008）と第4章（Information as an Economic Commodity）では、それぞれ、2008年のリーマンショックを引き金にした金融危機と、市場における情報の役割についてのアローの所見が綴られている。第3章のようにアローが金融危機について語ったインタビューはないので、晩年のアローの一面を知るかっこうの章といえるかもしれない。アローはサブプライム・ローン問題を生んだ金融規制緩和は問

題であったと指摘し、グラス-スティーガル法を廃止したクリントン政権の責任を問うている。市場は、売り手と買い手の情報の欠如と将来の不確実性のため不完全なのだから、そのリスクを減殺するような措置（銀行が不動産売買する際のレバレッジを下げる）が必要である。それは、第4章で情報の経済学に言及した部分にも通ずるアローの市場観でもあり、彼が晩年においても人間の本性と市場の仕組みの深い洞察を持ち、理論と整合的な現実への処方箋を持っていたことを示している。

総じて、本書がこれまでの研究書や論文で明らかにされている以上の新たな発言をアローから引き出しているかといえば、それは限られているというのが結論だろう。本書の意義は、これまでの研究論文が示してきたアローの人物像を補強することにある。インタビュー時、アローは80代後半から90代という、人生の総括を行う時期にあった。その長い人生を振り返るにあたり、記憶の中の自分を実際の自分と取り違えることはありそうなことだろう。しかし、それは彼には当てはまらない。アローほどに緻密で正確な記憶を持ち、業績と思考が生涯を通じて一貫して展開した人物は、そういないのではないか。そのようすは、驚異的ですからある。

（西本和見：中部大学）